

Café des open



三浦一族

Menu 第30回

永享の乱と三浦時高

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

室町時代の関東は、室町幕府の地方統治機関の1つである鎌倉府が治めました。その長は、鎌倉公方といい、足利尊氏の血筋を引く一族が代々就任しました。そして、これを補佐したのが関東管領であり、上杉氏一族が世襲しました。

この鎌倉府において、三浦氏はどのような立場にあったのでしょうか。鎌倉時代、三浦惣領家（本家）当主が代々称していた「三浦介」の称号は、惣領家滅亡後、佐原一族が継承しました。その系譜をひく三浦高継は、足利尊氏のもとで侍所の重責を担い、子の高通（たかみち）は相模守護を務めました。この高通以後、高連（たかつら）、高明と3代にわたり、三浦氏は相模守護を担います。室町時代の守護の役割には、刈田狼藉（勝手に他人の田の稲を刈り取る行為）を取り締まる権限や使節導行（所領争いの裁判結果を強制執行する権限）などがありました。他方、鎌倉府管轄国の守護や有力大名層は、在倉制（在鎌倉制）であったため、相模守護であった三浦氏も、鎌倉に出仕していたと考えられます。室町時代の三浦氏（三浦介家）の所領は、主に三浦半島南端部を押さえるに留まり、三浦半島全体を支配した鎌倉時代の三浦惣領家全盛期の勢力範囲と比べると、少ないものでした。それでも三浦氏が代々相模守護を任されたのは、同氏が源頼朝の平氏打倒の旗揚げ以前から源氏を支え続けた一族であり、当時の関東武家社会の中で、その家格が筆頭格にあったからではないかと考えられています。

さて、鎌倉府による関東の統治が行われる中、次第に鎌倉公方は室町將軍家への対抗意識を強めるようになり、両者の間には対立関係が生じるようになります。やがて、室町將軍と鎌倉公方との全面的な合戦へと発展したのが、永享10年（1438）に勃発した永享の乱でした。この時、鎌倉公方を補佐する役割であった関東管領上杉氏は室町將軍側に与します。関東管領は、鎌倉公方を補佐する一方で、幕府と鎌倉府を取り次ぐ役割があり、またその任免権を室町將軍が握っていたことから、時に鎌倉公方の行動を諫めることもありました。実際、6代將軍足利義教への対抗心を隠さなかった鎌倉公方足利持氏に対し、関東管領上杉憲実（けんじつ）は折に触れ諫言しますが、聞き入れられず、逆に持氏が憲実を討伐する動きに出たため、憲実も幕府勢とともに持氏に対抗しました。これにより、將軍義教及び憲実と持氏との間での合戦が勃発したのです（永享の乱）。

永享10年8月16日、持氏は、鎌倉を発ち、鎌倉街道を北上し、武州高安寺（東京都府中市）に出陣します。鎌倉公方は、鎌倉を出陣する際には、高安寺に布陣するのが恒例であったため、永享の乱においてもこのような動きをとりました。一方、鎌倉は、公方不在となるため、鎌倉を衛護する体制が必要となります。従前から、公方出陣につき、留守中の鎌倉警固を命じられてきたのが相模武士たちでした。そのような中、三浦氏当主であった時高は、先例により、鎌倉警固を命じられます。しかし、時高は、近年は窮乏して力がなく、軍勢も十分に用立てられないことを理由にこの役を固辞します。実際、三浦氏は代々相模守護を担ってききましたが、それは時高の父高明の頃までで、時高の時代には相模守護の立場にはありませんでした。しかし、結局、持氏はこれを認めず、時高は鎌倉警固を担わざるを得ませんでした。



足利公方邸旧跡（鎌倉市）

9月、京から鎌倉に向け出陣していた幕府勢が箱根に到達し、持氏勢と激しい合戦が行われました。これを破った幕府勢は、10月初旬、大磯付近に進み、その後、鎌倉に到ったとみられます。この時、鎌倉警固の役であった時高は大きな決断を行いました。時高は、將軍義教の調略を受け、持氏から離反し、鎌倉を放棄して三浦の宿所に戻ってしまうのです。この時高の行動については、幕府勢

の鎌倉入りに呼応した動きだったのではないかと指摘がなされています。三浦に戻った時高は、10月17日、鎌倉に夜襲をかけ、「数千軒」を放火します。さらに、11月1日には、再び他の武士らとともに鎌倉に押し寄せ、持氏の御所を襲撃し大損害を与えました。

翌2日、持氏は相州葛原（藤沢市）で憲実の被官と遭遇した際に降伏し、その後、称名寺（横浜市金沢区）に入り出家しました。しかし、幕府は持氏を討ち取るように命じ、翌年2月10日、憲実は持氏が籠る鎌倉の永安寺を攻め、自害に追い込みました。こうして、永享の乱は幕府勢勝利で幕を下ろしますが、この戦いにおいて時高が果たした役割は大変大きなものでした。

この後、関東は享徳3年（1454）に勃発する享徳の乱を経て、長い戦国の世に突入していくこととなるのです。

参考文献：山田邦明「三浦氏と鎌倉府」（峰岸純夫編『三浦氏の研究』、名著出版、2008年）、拙稿「永享の乱における三浦氏の動向とその位置づけ」（『三浦一族研究』23号、2019年）